

された。吉田松陰は京都に尊攘堂を創設して志士の英霊を弔祭することも勿論、彼の熱心に唱導するところであったが、その究極の目的はむしろこの地に大学を設立して天下の俊英を集め、国家有用の偉材を育成することにあった。このことは安政六年十月二十八日入江子遠宛の彼の書簡に明瞭に言及されている。東京大学に拮抗して自由清新の学風を標榜する今日の京都大学の興隆と盛大を泉下の松陰の英魂は如何なる感慨を以て凝視していることだろう。明治三十年六月京都にも待望の京都帝国大学が遂に創設された。明治三十六年四月尊攘堂の新築が1ケ年の歳月をかけて前記の場所に竣工した。旧堂の所蔵品は一時ここに搬入されたが所蔵品のより安全な保存を考慮して附属図書館書庫に移搬された。ここに始めて松陰の悲願も達成され、また品川の年来の宿望も漸く実現することができた。尊攘堂委員は明治三十四年六月以后毎年十月二十七日の松陰忌、二月十六日の品川忌に尊攘堂を借受け両先賢と志士の慰霊祭を営むこと、同時に堂の所蔵品を展覧して公衆の閲覧に資することを京都帝国大学に申請して受入れられた。更に大正十年三月以降は従来の毎年二回の祭典を秋期（十月二十七日松陰忌）一回の小祭、三年目に一回の大祭を行うことに改めた。

附属図書館は尊攘堂の保管、所蔵品の整理、寄贈（図書及び物品）の受入、その他、堂及び物品の利用、運営等一切の事務を担当した。また毎年の祭典を執行し堂の所蔵品を展示して一般公衆の参観に供した。附属図書館は遺墨、遺品を祭典の際に展覧するだけでなく積極的に篤士家の要求に応じてその研究の資料として提供し、或は公私立教育団体の展覧会に出品する等、機会ある毎に松陰、品川両先賢の遺志の継承につとめた。終戦以后、国民の大多数は勿論、京大内でさえ尊攘堂が存在していたことを知る者は多くない。例えば知っ

ていても殆どの者は関心を持たないだろう。尊攘堂そのものの存否はともかく、その所蔵する遺墨遺品は幕末維新の志士がこの世に残した涙痕の証言である。彼等によって近代日本の基礎は築かれた。まことに彼等の遺墨、遺品は黎明日本の開眼を報ずる警世の曉鐘であり、幕府の崩壊を弔する悲傷の挽歌である。

戦後は既に終わったといわれる今日、歴史の現実には客観的に評価されてよいであろう。現在、幕末維新史研究の業績は夥しく発表されつつあるが、まだ未墾の研究分野も少なからず残されていることだろう。もしこの分野に解明の鋏を振わんとする研究者があれば尊攘堂の所蔵品は必ず有力な資料を提示することだろう。戦前、尊攘堂と称せられた図書の一群、並びに尊攘堂の所蔵品はすべて現在「維新特別資料文庫」の中に収納されて其の根幹となっている。尊攘堂とその所蔵品は終戦当時の混乱にも拘らず幸に被害を蒙ることなく、所蔵品は特別文庫の名称で附属図書館貴重書庫内に保管されている。志士の遺品、遺墨は点数も多く内容も多種多様で、ここに其の一々を挙げることは出来ない。その品目の詳細は尊攘堂遺墨集、尊攘堂遺芳、尊攘堂聚英等の解説に譲って、ここには上記の諸書中より著名の二、三を次に抽出して一斑を挙げ、その全貌を窺うことに止める。吉田松陰筆書簡（佐久間象山。横井小楠宛）。品川弥二郎筆 吉田松陰訓。西郷隆盛筆 書簡（品川弥二郎宛）。大久保利通筆 薩長芸盟約書。木戸孝允筆 函嶺之詩。高杉晋作筆 弔吉田松陰詩。坂本龍馬筆 書簡（頼三樹宛）。佐久間象山筆 題那波利翁像詩。高山彦九郎筆 在京日記。入江九一筆 吉田松陰詩。松下村塾一燈銭申合帳。地震計 佐久間象山考案。紙捻詠歌 平野国民獄中の製作。奇兵隊日記。（鈴鹿蔵-附属図書館元職員）

—— 図書館界の動き ——

第25回国立大学図書館協議会総会

さる6月14～16日、筑波大学を会場館として標記総会が開催された。第1日は午後開会式、第2

日は全体会議、第3日は分科会と全体会議が行われたが、主な事項について以下に摘記する。

まず報告事項として、各調査研究班「図書館機械化」（継続）、「大学図書館改善」（終了）、「図書館相互協力」（継続）の報告と「大学図書館基本問題 特別委員会」（終了）の報告があった。研究集会は「大学図書館の相互協力とネットワーク」をテーマとして講演と討議が行われた。

第3日の分科会は3部に分れて討議が持たれ、午後にその取りまとめをして、今回の総会は終了した。会場となった筑波研究学園都市内に、主要施設の新しい建物が点在する地域の広大さと自然環境の快適さは参加者に新鮮な強い印象を与えた。

なお各分科会から出された要望事項は7月12日の常務理事会でまとめられ、7月28日付で文部大臣はじめ関係方面へ要望書として提出された。

この内容は次のとおりである。

A かねてより関係当局の努力によりその実施面において相当の成果があがっているが、さらに

特段の配慮を要望する事項として、1 予算について図書館維持費、夜間開館・休日開館に必要な経費、外国雑誌購入費、参考図書購入費、学生用図書購入費、特別図書購入費の増額。2 職員について参考業務担当職員の増員。

B 以前よりたびたび要望してはいるが、まだ実施されていないので格別の配慮を要望する事項として、1 冷房設備の設置とその維持費。2 図書館職員について相互協力業務担当職員等の6項目（前年度通り）。

C 本年度上記総会において新たな問題としてとりあげられたので、是非配慮を願いたい事項として、身障学生に対する図書館サービスを充実させるために必要な職員の増員。

D 特別要望事項として、大学図書館関係諸基準の改訂、とくに施設基準の抜本的改訂をはかるとともに、それらを裏づける措置をとること。

日本図書館研究会・図書館学セミナー

——図書館の仕事の原点としての「選択」を考える——

上記セミナーが、さる7月14・15日の2日間、比叡山「延暦寺会館」で開催された。今回のセミナーは、「図書館学および図書館学の専門的業務のなかで中核的と考えられながら、理論化が困難で経験的に扱われている『選択、の問題』」に焦点をあて、「選択の現況、日常的に直面している問題をふまえた上で選択理論に学び、それを図書館業務のなかに具体化していく基本的な方向づけとしての収集方針の作成という問題を検討する」主旨で開かれたものである。78名（大学40名、公共31名）の参加者があり、定員をオーバーするほどで「選択」についての関心の強さが感じられた。

第1日は、酒井忠志氏（京都府大）、西田博志氏（大阪府立図）から、大学と公共図書館における図書選択の現状が、日常業務のなかで片手間として扱われていること、図書館員より利用者が文献に精通していること、蔵書構成・読書の自由の確立のためにも選択基準の確立と選択業務の確立の必要性が強調された。夜には、大学と公共に分

かれて図書選択の実状報告をもとに経験交流を行った。第2日午前、河井弘志氏（日体大）より「図書選択理論の発展—実務学から科学へ—」と題して、図書選択論史の考察、古典的図書選択論や良書論などの実務学について論じ、さらに、要求・読書興味調査・書評・蔵書評価など文献を紹介しながら、選択の実務学から科学（理論化）への流れを詳細にわたって解説された。まとめとして、館員の選択に対する関心の必要性を強調された。最後に（第2日午後）大学と公共に分かれて「収集方針の意義と作成」をテーマに大学図書館では、三上正礼氏（大阪経済大図）から成文化されている収集方針の事例報告をもとに討議を行った。選択者は利用者か館員か、は意見の分かれるところであるが、選択権の問題は別にしても収集方針の早急な成文化とその公開が必要であることを認めあうなど、熱心な討論を行ない、盛会であった。